



しよいんづくり

## 書院造は、なぜ「書院造」っていうの



つけしよいん ざしき  
付書院などの「座敷かざり」をもつ部屋や建物を、  
「書院」とよんだからだよ。

きぞく  
貴族の住宅と、武士の住宅のちがい

平安時代に貴族が住んでいた、<sup>しんでんづくり</sup>寝殿造とよばれる住宅は、屋内の大部分を広い部屋がしめ、<sup>しんしつよう</sup>すみに寝室用の小部屋がありました。室内は板じきで、人が座る場所だけ、<sup>かまくらじだい</sup>たたみがしいてありました。お客をもてなすための、特別な部屋はないので、ふだん使っている広い部屋を、もてなし用に使いました。一方、鎌倉時代からの武士の住宅は、しだいに、屋内をいくつもの小部屋に分けて、<sup>むるまちじだい</sup>たたみをしきつめるようになりました。それともなって、ふすまなどの引きちがい戸が発達し、柱は、丸い柱から四角い柱に変わりました。<sup>めしつかい</sup>室町時代の終わりごろには、武士の住宅は、お客のもてなし用、ふだんの生活用、召使の生活用（台所）の三つの部分に分かれました。いちばん良い場所は、お客のもてなし用の部分で、いちばん大切な部屋には、おし板（<sup>とこま</sup>床の間）・<sup>まど</sup>たな・付書院（床の間の横側に窓を設け、板張りで机のように作った所）などの「座敷かざり」を設けました。

## 「書院」がある住宅の形式を、書院造と見なすようになった

「書院」はもともと、鎌倉時代の<sup>ぜんしゅう</sup>禅宗のお坊さんの住宅で、<sup>しよさい</sup>居間と書斎の両方の役目をしていた部屋のことです。江戸時代には、付書院などの「座敷かざり」がある部屋や建物を「書院」とよぶようになり、そのような住宅の形式を、書院造と見なすようになりました。明治時代から後、書院造は、日本式住宅の基本的な形式として広まり、今の日本式住宅にも、引きつがれています。

